第二章 性暴行から売春へ





52

端に言うならば性暴行など最悪の侮辱でも我慢できる状況を私は見て知っている。 否その状況を体験した村人はほぼ同様であろう。だから村人が共産主義者になった けが最優先であった。これは戦争を体験していない人に理解することは難しい。極 までは、何か性的不道徳そのものに見えていたコンドームも平気になってしまった。 長く切ってゴムのヒモをつくり、靴下の足首部分に編み込んで商売していた。それ を入れて遊んだりした。私のおじの家ではそれを安く仕入れてきて、カミソリで細 雨が降るとコンドームがあちらこちらから流れてくる。子供たちはコンドームに水 人を許し、村の中で売春婦であった女性を村人として受け入れて仲良く暮らしたの 戦場に慰安婦がなぜ登場するのか。戦争中には儒教倫理などはなく、命の生存だ 米兵たちを性病から守るために、米軍ではコンドームを大量にストックしている。 私が戦争から学んだ一番大きい教訓であった。

激しい殺し合いの交戦の時とその直後、軍人は狂っていたようであった。五味川純 ないことではない。命が危険な状況で、あなたはどうすべきか読者に問いかけたい。 平の『人間の条件』を思い出してほしい。 一時的ではあるが、一部の軍人の性犯罪も戦争中を前提にして考えれば理解でき

なったのであった。 感じていた。つまり、性暴行を免れるために村人は売春婦を歓迎し、 彼女たちがいなかったら、村の女性が全員性暴行されるのではないかという恐れを 人は彼女たちを歓迎したのは上述した通りである。彼女たちは村の救い主であった。 米軍が駐屯し、性暴行が多発し、売春婦たちが多く村に現れるようになると、村 村は売春村に

要悪だと思ったのである。村人は売春婦たちに部屋を貸せば収入も得られるし、 売春を認め正当化し、それを積極的に収入源とした。村人は売春婦を肯定的に見て を性的に安全に守れる、 いた。村人は、自分の家族や親族の貞操を守るためには、他人である売春婦は、 暴れる軍人の性暴行を防ぐために、住民たちは伝統的な儒教的性倫理を緩めて、 一石二鳥の存在と考えた。そして村は一気に売春村になっ

地域に広がり、売春婦が半公娼的な形で存在するようになった。 たのである。そのような現象は、私の出身村だけではなく、駐屯基地を中心とした

54

青少年保護法(末成年者に金品を与え性行為をすると一年以下の懲役)も、売春防 るという。淪落行為防止法(相手方も一年以下の懲役か三百万ウォン以下の罰金)も、 止にはほとんど効果が出ていない。 韓国には「売春に従事している女性が百万人」(検察庁と女性開発院の報告書) ており、現在も韓国では売春があり、「売春天国」だとまで言われるようになった。 しかし、性暴行や売春は戦争中だけに限られた現象ではない。それが戦後も続い

それに対して一般女性の貞操を守る防波堤として売春婦を必要としたのである。 それに反する売春の盛況はどういう要因で持たされたのであろうか。それは、儒教 的に徹底した貞操観を強く要求する社会であるからこそ、性暴行が頻発する場合、 は席を別にする)という厳しい性道徳をかたくなに守ってきた韓国社会において、 特に貞操を尊重し、儒教的な原則であった「男女七歳不同席」(七歳以上の男女 戦争を体験して人間の本質について考えて書いているこの文に、戦争を知らない

として裁くことはできる。しかし治安不在で行われる戦争中の犯罪を裁くのではな ことはナンセンスであろう。人間の本質を変えて悪行動をもたらした戦争を大犯罪 人が反論できるとは思えない。戦後の世代が戦争中の殺し合いや性暴行などを裁く 戦争を起こした国家を裁くべきである。

いわゆる従軍慰安婦問題

るものであることは早くから私は知った。 て韓国で人権や政治問題とされた。それが吉田清治の嘘の話、 日本軍従軍慰安婦の話を聞いたことがなかった。しかし、日本発祥のニュースに乗っ 韓国を隅々まで現地調査をした私だけでなく、多くの学者からも一度もいわゆる 朝日新聞の誤報によ

戦後半世紀になるまで慰安婦問題が表に出なかったことについ ては、 日本植民地

などの理由が韓国内で挙げられる。 を軽く扱ったこと、当事者の女性たちが恥ずかしく思い帰国しなかったということ 政府が書類を焼却処理しその事実を隠していたとか、 化しようとしなかった。 して隠れている彼女たちが他国の男に汚されたという事実だけで、 また政治指導者、 知識人などは、性的堕落者と 占領期において米国が戦争犯 これを社会問題

56

全体の恥だという言説が作られたのである。 民族的犠牲者であり民族主義を高める名分が与えられたからであろう。つまり、 ただ反日感情を煽るのに熱心であった。彼女らが自ら表面に出るようになったのは、 国の女性の処女性が日本軍隊によって奪われたことは、その女性だけではなく国民 「慰安婦たちの恥は韓国人全体の恥である」と言い、 そして、この問題は歴史の中に埋もれてしまいそうであったが、女性人権団体が、 日本軍の慰安婦と、 「日本政府に対し歴史的道義的責任の明確化」を公式に求めた。 しかし、韓国のマスコミなどの世論は問題の本質に関心を見せることなく、 米軍慰安婦は 『募集』 当時、金大中大統領は、慰安婦問題に の上では明確な差異が見られない。 慰安婦のことを問題として提

うなことをしていただろう」と言ってしまえば、和解の道は決して開かれな なので、韓国人の持つ感情の違いは大きい。それを理解せず、 し、米軍慰安婦は日本から解放してくれ、朝鮮戦争で味方となった国に対するもの 米軍慰安婦』 もちろん韓国側も、 日本が行った慰安婦制度とはあくまでも植民地として受けた行為。それに対 が跳ね返ってくる。 政府が慰安婦問題を外交に利用すれば、 慰安婦像を建てるなら、 それと並 ブー 「韓国だって似たよ メランのように べて米軍慰安

韓国・日本大使館前の慰安婦像

させないために、 の主張に耳を傾けるべきだろう。 慰安婦問題 幼稚な外交は今すぐやめるべきだ。 の過熱で隣国へ 日韓両国とも真摯にお互 の憎悪を増幅

婦像も建てなければならない

という人も

58

戦前 私たちの村が体験した疑いもない真実であるが、いくら言っても聴く耳をもたない り米兵が朝鮮戦争の時にひどい性暴行をしたということが、なぜ問題にならないの なるのは軍人たちの性暴力である。 の紛争で性暴力があり、またロシアの紛争でもそういうことがあったのに、なぜか いったことを私は知っており、 朝鮮戦争時の中共軍はきわめて紳士的であった。米軍と韓国軍は性的に暴力的で なぜ取り上げようとしないのか、私はこちらの方がより大きな問題だと思う。 って行っているからだと言われている。 の日本の「従軍慰安婦」問題だけが取り上げられる。それは国家が慰安婦制度 が起きれば、 少なくとも当時田舎で暮らした人はみんな知っていると思う。これは どんな戦争にも性暴力はつきものであろうか。 それを言っても今の韓国人たちは誰も信じてくれな なぜ明らかな犯罪である国連軍の性暴力、 しかし本来、軍組織の問題より問題に ユーゴスラビア つま

方、外貨を稼ぐ存在として政府に重宝されていたことを示している。 を愛国的行為と考えていた。これは彼女たちが旧来の儒教観念において蔑まれ 安婦」は、米韓両国による政策であった。韓国政府は米軍慰安婦たちが米軍の性的 取っていた。私の故郷の村が発祥地の一つとなり、やがて全国に広まった「米軍慰 欲求を満足させ、 朴正煕政権は儒教の性倫理を守ろうとしながら、一方では売春を認める政策も 朝鮮半島の安全保障をしてくれるという意味で、彼女たちの行動

た。 主(西洋の王女)と呼ぶ。 である。売春婦は外貨を稼ぐ祖国近代化の役軍として愛国者になる。 韓国では妓生をカルボ、 失業した女性たちを集めて「あなたたちは愛国者だ」といい、 米軍相手の売春婦を洋カルボと蔑視する。 つまり売春婦(カルボ)と王女という両面を持つ呼び名 政府は離農 一方では洋公 素養教育をし

一九六一年成立の淪落行為等防止法によって性売買が禁止されたものの、 ともいうべき取り締まり適用外の場所を作った。資本主義経済が進行するよう 政府は全国百四か所を「特定地域」として指定している。「政府公認の売春特

59

済政策と韓米関係の友好関係の維持という政策によるものであった。 定によって、米軍兵士を韓国で裁判することはできなかった。米軍による人権を犯 きく貢献したことは否定できない。韓国人が被害を受け、殺されても、韓米行政協 争のときは恩恵深い友好軍であり、その駐屯は朝鮮半島の安全保障の象徴的な存在 る強姦や買春は政治的、社会的に大きく問題になることはなかった。米軍は朝鮮戦 す事件も社会的に大きく問題になることはほとんどなかった。それは韓国政府の経 理になる。たしかに国連軍や米軍は北朝鮮から韓国を守り、自由民主化のために大 であった。 戦後米軍の買春は多くあり、法律的な制約もあまりなかった。そのため、米軍によ 韓国は米軍の買春については、積極的に批判する政策は取られていない。 すなわち、安全を作ってくれた彼らに命より尊い貞操を捧げるという論 つまり、

7 いる。これらの地域について「非道徳な性生活」「性病・麻薬中毒者」「社会病理 現在韓国では二万八千名の米兵が、九十六か所の地域で八千万坪の土地を占有し

しなかった。 や買春については、韓国政府はもちろん、ナショナリストやフェミニストも問題に の温床」という指摘があるが、韓国政府の手厚い援護のもとにあり、米軍の性暴行

判決を受けた。 は現在も解消されていないばかりでなく、拡大再生産されている」という主張を述 国主義の糞で汚された地である」という題名の通り、「韓国における米国の犯罪性 な反米主義が起きた。南廷賢(一九三三一)の小説『糞地』では「韓国の地は米帝 べた。著者の南廷賢はこの「糞地筆禍事件」によって一九六五年に起訴され、 しかし人権思想や民族主義が高調するにしたがって、米軍の性暴行などに批

二十五万人から三十万人と推算されている。 て様子が異なることがわかる。米軍相手の売春婦の数は、戦後四十年間にお 外国の軍隊の強姦や買春に対する政策や態度は、当該の国家間の関係によっ 7

米軍よりも、 キャサリン・H・S・ムン(Katharine H.S. Moon)氏は、日本に駐屯して 韓国に駐屯する米軍の買春が盛況であることに注目して、 後者の状況

とも思われていたのである。韓国政府は、米軍の買春と性病などの問題は原則的に させ、それが朝鮮半島の安全保障のために努力する韓国政府に協力する愛国的行為 の売春は強制的ではなかったと述べている。 日本植民地時代の従軍慰安婦が組織的に強制されたものであるのに比べて、米軍へ アメリカ側のものであるとし、積極的に取り締まる政策は取らなかった。 ムンによれば、米軍基地の売春婦たちは米軍の性的欲求を満足させて志気を上昇

と訴えた。そして女性団体、キリスト教団体などが連帯して大きな社会問題となっ を起こした。 らまかれていた。この殺人事件が一つの契機になって、女性の人権団体が反米運動 全身に生傷がある状態で発見された。暴行を隠すかのように、全身に洗剤の粉がば 業員だった尹今伊さんが米兵ケネス・マークル(Kenneth Markle)によって殺され、 ある女性団体は「駐韓米軍は韓国で毎年二千余件の犯罪を起こしている。その 一九九二年十月に尹今伊事件が起きて事態は急変した。米軍クラブの従 フェミニストたちは、 米軍基地周辺の女性たちこそ性の被害者である

求する」と当時のクリントン大統領に請願した。 犯罪の根本的な解決のためにも韓米行政協定の改正を含めて犯罪の根絶の対策を要

どを中心に「駐韓米軍犯罪根絶運動本部」がついに結成された。さらに一九九八年 設立された。その後、常設的な組織の必要性から、一周忌を前にして、女性団体な りが爆発するかのように「駐韓米軍による尹今伊さん殺害事件共同対策委員会」が 罪犠牲者追慕祭 十月二十五日、韓国の民主女性会は、尹今伊事件を忘れないようにと「駐韓米軍犯 米軍駐屯半世紀を経て、尹さんの事件を契機に、 尹今伊氏六周忌を追悼する」式典を行った。 無言の抗議を超えて、民衆の怒

のだと考えられる。 ミニズム・人権意識が広がることで、 らある貞操観・性倫理の底流が存続しており、社会運動などによりキリスト教・フェ このように、米軍批判が出てくるような変化が起きたのである。それは、従来か 韓国民の貞操観・性倫理が改めて意識された

はアメリカ第七師団が駐屯しているが、そこはまさに売春の地域である。 しかし、朝鮮戦争時の米軍と韓国政府の構図が、いまなお続いている。 夜行って 東豆川に

63

鉄道の線路のところにズラッと売春婦が立っている。

受けた記録がたくさんあるのに、国民も政府もあまり大きな問題として取り上げな もしれない。 ように大きな問題としては扱わない。これは戦後間もないころの日本と似ているか 女の死体をかついでデモをした。ところが韓国政府は、日本の沖縄で起きた問題の も政府も大問題だと取り上げるようになった。 なものだったのではないだろうか。日本でも当時、米兵から日本の女性が性暴行を かった。それが、最近になってようやく、沖縄での性暴行事件をきっかけに、 そういう状況の中で、韓国人の売春婦が米兵に殺された。それで売春婦たちが彼 日本の占領軍と当時の日本政府・日本国民の意識も、 やはり同じよう 国民

ち自身が犯してきた問題として、きちんとしておかなければならない。韓国政府は、 識が弱かった。戦争と性暴力の問題をより広げて見る必要がある。 国連軍から受けている恩恵に気を使い、国民のほうもそういう人権問題に対する意 戦争と性暴力の問題は何か日本だけの問題といわんばかりの態度を改め、 自分た

かつてベトナム戦争に韓国軍が参加し、 ベトナム人女性に数々の性暴力をしたと

ナムにはたくさんいるのも現実である。しかし韓国内ではそれほど問題視されてい いう。また、 韓国軍兵士がベトナム人女性に産ませた子供(ライダイハン)がベト

戦争と性

本体

性自身だけではなく、むしろその女性の夫や家族、そして国家の名誉とプライドを 名誉を失わせるため、多くの女性を強姦した。セルビア軍によるボスニアのムスレ に性暴行をすることもある。例えば、フランス軍は戦争中アルジェリアの男たちの 辱めるために行われていたといわれている。つまり民族感情が爆発して敵国の女性 ムとクロアチアへの組織的強姦は三万から五万ともいわれており、 戦時中の性暴行といっても、ただ性欲を満たすための暴行だけではない。その女 百人に一人は好

や中国人に、インドネシア軍が中国人などに性暴行を犯した。韓国軍による自国民 が韓国人やベトナム人に、アジアの中でも韓国軍がベトナム人に、日本軍が朝鮮人 そのほかにも、スペイン人がメキシコを征服した時、ドイツの農民戦争の時、 第二次世界大戦の時、 朝鮮戦争とベトナム戦争の時、 国連軍

への性暴行も記憶に残っている。

ける性暴行は人種差別や民族差別から起きたとも言われている。 インドネシア軍兵士は中国華僑の女性を強姦した。これらの事実から、 ベトナム戦争期には現地女性が強姦され、五十万人もの売春婦が出現したという。 もちろん厳しい軍律があったにもかかわらず、兵士たちは多くの女性を強姦した。 戦争期にお

の安正孝(Ahn Jung Hyo)が自身のベトナム戦争体験に基づき、小説『白い戦争 (White War)』と映画でそれぞれ、主人公が戦争中に起こる殺人や強姦などの状況 またベトナム戦争における米軍や韓国軍の残虐な強姦や殺人については、小説家

ほどの状況であることを表現しているのである。 で精神異常になり自殺する内容を描いている。つまり戦争が精神異常をひき起こす

学出身の主人公が様々な体験をし、成長する物語だが、この中で米兵がベトナム 間同士の殺戮と狂った世界とは何かを問題にする。ベトナム戦争に参加した若い大 ベトナム戦争で女性の膣に棒を押し込み殺すこともあった。 人の頭をかち割る惨たらしい狂った世界を描いている。映画を通じてオリバー・ス -ーンは「これが戦争なのだろう」「平和とはなんだろう」と訴える。実際に米軍は、 オリバー・ストーンの映画『プラトーン (PLATOON)』でも、戦争と狂気、人

本体

行われたと訴えている。 である。この作品の中でも、戦争や侵略という巨大な暴力を背景に殺人や性暴行が フランシス・フォード・コッポラの『地獄の黙示録』も戦争と狂気を描いた傑作

に対する敵対意識を持っていたわけではない。むしろ敵ではないはずの韓国の女性 への性暴行が主であった。それは戦争という狂気の精神状態のようなものによって しかし朝鮮戦争の時はやや話を異にする。国連軍は必ずしも強姦する理由に敵国

兵さえも治安に力が及ばない。軍人たちがもっとも自由な状況になる。「人間の条件」 説明できるであろう。「戦時中」、「交戦中」の作戦権、自己防衛権などは非戦中、 休戦中、平和などとは対立する軍事的な概念である。最前線では警察はもちろん憲 るのである。 ない境界状況かも知れない。そのような状況の中では突発的にしろ組織的にしろ殺 からも解放されて動物的になる状況かもしれない。それは狂気でもなく、正気でも 人、強姦などが起こりやすく、戦争には性暴行が「付きもの」だと一般的にいわれ

鮮戦争の時に韓国人の女性に、終戦の時に日本人の女性に対しても強姦などの性暴 る。それは軍の性を管理する政策と関わるものなのかもしれない。「中共軍」は朝 私は朝鮮戦争の時、中国の軍隊が性暴行を全くしなかったことを体験的に知ってい との可能性を示すものである。 行はなかったという。再度言うがこれは戦争が必ずしも狂気にはならないというこ 上述したように、戦争中といってもすべての軍隊が性暴行を犯すわけではない。

弗三章 売春の広がり



会がその存在を許すのかという問題点を設定し、韓国における朝鮮戦争時の性暴行 してみる。そして売春が発生する過程とその機能や意味の解釈に接近してみたい。 本稿では、 最近の喫茶店での売春について、私の体験した事実も踏まえながら、 売春が反社会的であり、 非倫理的であるにもかかわらず、どうして社

故郷の村が性暴行と対置して売春村となった経緯については上述した通りである。 言うまでもない。特に女性には貞操を守ることや淑女としてのモラルが厳しかった。 先祭祀を大切に守っている村である。従って性に関しても儒教的な倫理が強いのは その売春は性暴行を含みながらも基地村に定着している。しかしその売春は基地村 しかし戦争は儒教社会の性的倫理もすっかり変えたのである。 私の故郷は両班同族村ではないが韓国の普通の農村であり、 ったものではない。ここではより一般的に売春が行われる現実に迫ってみる。 朝鮮戦争により私の 儒教の通過儀礼や祖

とは難しいが、 度化によって正常な生理的緊張をゆるめる社会もある。 婚姻の枠内で社会全体の性的欲求を満足させることは出来ないと考えて、 のようなものもあれば、売春といっても愛人関係のようなものも多い。 クな関係、 の固定観念も激しく変化し、売春の有様も変化している。従って売春を定義するこ のような社会にも売春とその規制が存在している。しかし現代社会では結婚や売春 売春が反社会的な性の逸脱行為として規制する性倫理社会があり、 均衡と不均衡などの関係であるといえる。結婚にも一種の「得意売春」 あえて定義するならば、売春とは性の正常と性の逸脱のダイナミッ つまり程度の差はあれ、ど 一方合法的な 売春の制

非公式には性産業は繁盛している。 に東アジアでは妓生制度があり、現代社会でも表面的に取り締まってはいるものの、 おいて変わり、 側妻、 結婚と売春の区別が難しいというのは単純な皮肉ではない。 浮気、姦通といったことばの存在や意味もそれぞれ現代社会に

とまって長期的に駐屯している。 私の故郷の村に駐屯した米軍部隊は村を離れて、 その村にいた大部分の売春婦はそちらへついて 四キ口ほど離れた東豆川市にま

影響され、 ると言われている。 波州と鳥山、大邱などである。 ンプがあるところであれば同様で、 った。洋セクシーや洋 もし米軍が外出禁止になるとすぐ不景気になるという。これは米軍キャ 米軍部隊が駐屯しているところでの景気は米軍の外出によって カルボと呼ばれる売春婦が一個師団の兵士の二~三倍は これらの町並みはアメリカの風景のようであり、 全国的に有名なのはソウルの梨泰院、 京畿道の

外法地域として知られている。 扱っている店の看板を見たことがある。最近韓国のハイクラスの人は、 鮮戦争後白人と歩く女性は売春婦だと思われたが、 化に触れるために米軍部隊内のゴルフ場やレストランに通うのを好む人が多い の相手に執着して離れない。この結婚観の違いが韓国女性にとって国際結婚の落と によると、米軍人は恋愛の相手を変えながら結婚相手を探すが、 し穴となるようである。 私は大邱市のキャンプヘンリーやキャンプワーカー 売春婦が米軍 人と国際結婚をした例も多いようである。それを研究したところ 韓国人社会では女性は貞操をなくしたら結婚マーケットで 最近は国際結婚が多くなってお の米軍部隊 韓国の女性は一人 の前で国際結婚を アメリ カカ文

たちにとって理想的な結婚の相手であると考える。 ないという考えがあるため、売春婦たちは米軍人、 あるい は西洋人は自分

られる現象でもあった。 近までソウル駅と清凉里駅の周辺には売春婦が密集した。このような事情はよく見 主に軍人たちが利用する汽車の駅の周辺を中心に に流れて接待婦になっていることがわかる。売春婦たちは韓国軍隊の周辺にもいる。 の風』によると、貞操をなくして結婚マーケットでは救われない韓国の女性が日本 日本で水商売をする韓国人女性においても似た傾向がある。呉善花の 、淪落街、が形成された。 『スカ

米軍人を得意客にしている。ホームシック状態にある米軍人にとっては家庭的 気を味わうことができ、 売春婦たちはたいてい民家を借りて、 性的に堕落し、 運が良かったらアメリカへ行けるかも知れないという国際結婚の夢を持っ 口でもあった。売春婦たちにとっては得意客を作って国際結婚を狙うか、 社会から捨てられたと思われる売春婦にとって、 慰めになる慰安所のようなものだろう。多くの売春婦たち 家庭の雰囲気を保つような飾りつけ 国際結婚が可 をし てい 雰囲 7

金を稼いで商売をする資本金を作るのが主な目的である。 まい国際結婚を放棄し、貯めた金で喫茶店を経営したが、最近交通事故で死亡した。 て結婚するつもりで生活費も送ってもらっていた。しかし途中、 れば売春行為は結婚への道であるとも考えられ、実際その機能を果たしているア るが、 現象がある。 イロニカルな現象もある。韓国の喫茶店である「茶房」を利用した売春にも同様の なっている。 府や行政者が売春を取り締まろうとしているが、 C女は売春婦になって白人の子供を生んで育てていたが、他の米軍人と付き合っ 売春婦自らは最低のベースを利用して正常に戻ろうとしているのである。 淪落行為は結婚という正道から逸脱した行為であるが、売春婦の側から見 一般人から見ると売春婦は自分たちを性暴行から守ってくれる人であ 民衆の売春に対する見方はまた異 連絡が途切れてし

次に「茶房」 の売春に ついて考えてみる。

は知らなかった。農村や漁村の現地調査において、茶房は必ず立ち寄るところであ いたのである。 私は茶房(喫茶店)に頻繁に通ったことがあっても、そこに売春行為があること 茶房というものの特徴や機能に関心を持つようになって、初めて売春に気が付

茶房が最初であった。一九一九年、三一独立運動後に近代的な茶房が現れ、その後 比茶、洋湯) 日本人による青木堂、朝鮮ホテルの茶房などが現れ、一九二三年頃には日本人によっ が最初のものであり、 韓末の開化期において、西洋の外交員によって持ち込まれたコーヒー 韓国において本格的な茶房の営業がはじまったのは、日本植民地時代であった。 山において近代的な喫茶店が開かれた。 と紅茶は上流社会に広がった。仁川のホテルの付属茶房で売られたの ソウルでは一九〇二年にドイツ系ロシア人によるホテル式の その後は韓国人の芸能人による文化 (珈琲茶、

空間としての茶房が現れた。第二次世界大戦前は文化空間として展示会、 会などが茶房で催され、また失業者が集まる場にもなっていた。 出版記念

は以前の知識人による経営の方式が、女性のマダムやアガシ(ウェートレス)、 して厨房長による経営システムの登場により大型化したのである。そして茶房は急 戦前の文化空間としての茶房の性格は変わった。一九六○年代以後

増してきた。 アガシが二人、 一九六〇年一〇四一か所、一九七七年三三五九か所になっている。一人の経営者、 ソウルで一九四四年には六十か所であった茶房が一九五五年には二八六か所、 原付オートバイで配達する男性一人、コックの男性一人というメン

バーで営業している。 は住み込みで月百二十万ウォンであるから、十二万ウォンの紹介料を支払ったとい い、アガシには一か月分の給料を先払いして連れてくる。この茶房のアガシの給料 経営者はアガシを採用する際には給料の一割にあたる紹介料を職業紹介所に支払 給料だけでも大学教授の初任給よりやや高いので、住食を含めるとかなり高い

方であると言ったのは、同行したある韓国人の教授であった。

だ田舎には残っているのが現状である。 行する傾向にあり、 速に普及したが、現在都市においては日本式の喫茶店に近いコーヒーショップが流 やアガシたちが派遣され、付け払いにも応じる。このマダムシステムは全国的に急 悪くなり退職することもあるという。しかしマダムの主要な役割は客の管理である。 るのはマダムである。マダムはアガシたちの姉のように化粧方法、勤務時間、接待 のしかたなどの指導をする。マダムは精神的にも頼りになるが、時には人間関係が つとめたりする。評判の良いマダムには多くの客がつく。また注文に応じてマダム 茶房にはチマチョゴリ姿のマダムがいて、得意関係にある客の接待や話し相手を 経営者にはマダムやアガシを連れて来るいわば人事権があるが、アガシを管理す ウェイターの登場とともにマダムが消えつつある。しかし、ま

になると茶房を便利に利用できる。自分の行きつけの茶房を定めている者も少なく 人男性のなじみ客となれば一日数回足を運ぶこともまれではない。そして得意関係 田舎を問わず茶房が社交の場、憩いの場として重要であり、

に客に対してサービスをすること、そして得意客を多く確保すること、 ない。地方の都市では、茶房ごとに出入りする客の顔触れもだいたい決まってい 拡大していかなければならない。原付バイクを運転する男は、 いことは得意客がつけ払いではなくその場で会計を済ます現金商売にしないと商売 に走るという風景も都市では珍しくない。原付の登場はコーヒーの出前の拡大を意 茶房の経営の難しい点は、 出前を効果的にする。場合によっては、 いという。何より商売を繁栄させるためには、 他店との競争にある。隣の茶房に客を奪われないよう アガシ自身がオー コーヒーの出前の範囲を - トバイに乗って出前 アガシを乗せて走り さらに難し

味する。 ところへ配達し、逆順にカップを回収して帰る。 所か近いところへまとめて配達し、 コーヒー R茶房は一日百三十か所に出前すると言う。男が運転する原付の後にア ポットとカップを持って同乗して配達する。 コーヒーを客に出しておいて客が飲む間に他の なるべく多く回るために何 ガ 力

配達の注文は官庁の事務室、 旅館、 食堂、 個人の家庭まで多様である。 旅館や家



コーヒーを出前するアガシ (本文とは関係ありません)

アガシたちに話を聞

私はその中でそのような人のためにチケットというシステムがあるということを知

にならないと知らされないという。

り得た。このシステムは秘密であり、

かなり得意客

庭に一人で多人数分のコー

E

-を注文する人がいるが、その時は気をつけるという。

ところ、 トと 言われて初めてその存在を知ることが出来た。 私は調 いうシステムがあり、それを利用しなさいと マダ 一査のためにアガシと長く話をしようとした ムにボンという隠語で通じる「チケッ 時間当たりでアガシを専有する

チケット

とは、

電話をしてチケットを注文し、マダムは時間などを考慮して可否を検討、 システムのことである。客は気に入ったアガシやマダムを専有したいときに茶房に 合には時間当たりの値段を伝える。値段は茶房ごとに多少の差はあるが、 これが売春に結びついていることが社会的に非難の対象になっている。 一緒に飲みながら食事をしたいという人に対して、注文で応じると説明されたが、 一時間当たり二万ウォン前後である。名目としては、気に入ったマダムやアガシと OKの場

知られるようになった。反体制文人の妻であったジスク(キム・チミ)はもう堕落 るセヨン(チョン・セヨン)はお客さんの要求を断ってジスクに叱られる。大学生 セヨンはお金を用意すると言って色々なことを探している中で、パク船長と親密に の恋人であるミンスが訪ねてきて学費がなく学校を止めるしかないと聞かされて、 して江原道の港町でアガシを連れて喫茶店を経営している。初めてアガシ生活をす ジスクはミンスに会って説得する。 このことを主題にした映画『チケット』(林権澤監督)が人気をよんで、一般に パク船長との関係を知るようになったミンスがセヨンに絶交を宣言するが、 しかしミンスに断られる。

族を養わなければならないからである。 コーヒー配達に出て行って売春して来る女たちがお金にこだわる理由は一つ、家

ととした。 トをお断りしています。と書いた貼り紙が貼ってあった。そこで数か所を調べるこ 私が全羅南道の島々を歩いたとき、多くの茶房の人口には、わが茶房ではチケッ

本体

を歩いて出前する。 原付の配達員は置かないためアガシが遠くまで出前に行くことはなく、近いところ いわれている。マダムの給料は百五十万ウォン、アガシは百四十万ウォンであり、 T茶房は面事務所の所在地の九か所の茶房の中では比較的従業員の待遇が良いと

ホールが三十~四十%、出前が五十%、チケットが二十%という。チケットの費用 は全部マダムに支払われ、アガシは月給として貰う。しかしアガシはチケットを利 して一日の売り上げはようやく二十五万ウォンであるという。売り上げの割合は たりボン(チケット)料一万ウォンによる売り上げが二十~三十%あるという。 この茶房にも、わが茶房ではチケットをお断り、と貼り紙はあったが、一時間当

ウォンを先払いとして貰ってこの茶房に来た。 (二十九才) はアガシになって二年で、 光州の職業紹介所を通して百四十万

これはアガシが少ないので彼女の要求に応じたものであり、 介所に支払い、さらに彼女が前借りを要求したので五百万ウォンを貸し金とした。 茶房の経営者は紹介料として二十万ウォンをプラスした合計百六十万ウォンを紹 長く働いてもらうため

の保証金でもある。 なっている。 しかし一つの職場では通常、 三か月で辞めるときはその借金分を新しく雇い入れる方で負担するように ソウル市では朝九時出勤、 いろいろな事情から長く続かないのが常であ 夜二十二時退勤、そして非番として休日と

こで田舎であっても給料が高いところに勤めることになるがその分大変なこともあ るという。例えば、六か月ごとに性病検査などの健康診断を受けなければ保健証明 書を貰えず、それがないと営業が出来ない。 いうシステムであるから、アガシの給料は八十五万ウォン程度にしかならない

という。 ら一時において食堂や飲み屋で酔っ払った人の相手をすることが多く、 間内において金を儲けることが出来る。 チケットというシステムは通常朝八時から夜二十一時までになっていて、 しかしそれ以外の時間、特に夜二十三時か

て行かざるをえない。チケット注文の基本数は応対できる数の三倍以上である。客 るのが一般的である。注文があるとアガシは自分の意志とは関係なくシステムとし ても売春が法律上違反であるので告発することも出来ず、 の中にはいやらしいことをしたり無理なことを要求したりする人もいるが、 食堂では人件費が高いのでアガシを置かないで茶房のアガシを利用して商売をす て風呂代を貰うか、拒絶する。 また売春をしても金をくれない人もいて、困っ 泣き寝入りするしかない その時

を、 うという。 人がいる時と失恋した時は替える。前者においては新しく来た人が他姓に替えて使 いたい名前はそのまま使う。 いないという。 K 女 ここT茶房ではMを使用する。この世界では本姓を使う人はほぼいないが、 (三十一才) しかし姓名全部、 は本名の姓はKであるので最初はKを使ったが、 一回使い始めたものはずっと使うが、茶房に同じ姓の つまり姓+名前を全部別名に替えて使う人はほとんど 霊光郡ではH だ

冠山に来ている。 職業紹介所が多い 業紹介所を利用する。 移るのは化粧品売りのおばさんに頼ったが、 K女は全羅南道のある島で十か月勤めた後、長興、霊岩、求礼、 やはり光州の職業紹介所を通して移動するのだという。光州には (七か所) が、 K女は一定の所を利用する。 今はほとんどといってもいいくらい職 昔は茶房から茶房へ 珍島などを経て

見つけて結婚して幸福に暮らしているという。 結婚した。 例が神話のように伝わっている。 の場でもあるという。それぞれの茶房にはその茶房で結婚相手を見つけて成功した 付き合いを求められ結婚できる可能性もあるからである。つまり茶房は良 に移るという。なぜなら飲み屋に比べると茶房は昼の仕事であり、客からも正常な や堕落した女性が飲み屋に勤め、多少とも世間体の良い仕事を見つけるために茶房 初めてアガシとして茶房に来る人は、だいたい飲み屋からである。 彼は奥さんが浮気をして家を出たので、 先日この茶房のアガシが、 家事子守をよくする人を茶房で 金持ちのやさしい人と 田舎の家出娘

結婚を狙う

売春の広がり

買に遭う危険性もあるが、結婚は彼女たちの夢である。実際結婚生活を幸せに過ご 61 す人も多い。 傾向があるからである。 まわりが反対したり、うるさく口をさしはさんだりして、うまくいく率は非常に低 しかもやさしい人である。農村には行きたくない。商人がい 何故なら一般的に、 しかし概してアガシの結婚は難しい。良い相手が見つかったとしても 茶房のアガシがコーヒーポットを持って歩くのを蔑視する い。時には人身売

払って子供を人に預けて育てている。 ある人は、夫の暴力のために離婚して茶房に入り、 養育費を月三十万ウォンずつ

仕事であるので、三十才を過ぎてもそのままアガシをしている人も多い ダムになってもいいのにアガシとして働いているという。彼女は結婚はしたくない なしそうに見えてもいつかは動物的になるともいう。 長年の経験を積み能力がある人はマダムになれるが、マダムは責任のある難 なぜなら男は皆浮気者、二重人格者であるからだという。男はいくらおと 。K女もマ

この茶房に来る客の七十%程度は老人の男性であり、 アガシに触りたがる人が多

まらないという。若い客はそんな人が少ないし正直であるから良い客だという。 性は男性と一緒に来たり、 いという。客の話はどこから来たか、何才かなどといった決まり文句が多いのでつ 女性同士で来たりすることはあるが、 一人で来る人は

良いと働き甲斐があるからである。 連れて来たりすることもあるが、複数の茶房に顔を出して利用する人もいるという。 男性たちが経営者との人間関係から人との約束場所として利用したり、多くの人を 悪い感じはしない。言葉はおとなしくても卑怯な人は嫌いだという。小さい町では である。アガシに対して乱暴な言葉を使う人もいるが、人の好い人は口が悪くても 逆は困るという。例えば一人で来て長く座ってアガシ相手に煩わしいことをする人 アガシは売り上げが良くなるように頑張る。 一番良い客は、 人を多く連れて来て静かに話をして短時間で帰る人であり、その しかし難しいことが多い仕事であるという。 給料は決まっているが、売り上げが

茶房でアガシの体に触りたがる人も多い。 K女には辛い経験が多い。ここは港が近く乱暴な人が多く、 チケットの時には何をしてもよいように 特に口と手が荒く、

買ったので相手の反応を注意して見ていたら、西瓜に焼酎を入れ飲ませて暴行しよ 思う客もいて、性交を強要したりする。 治めるのである。 員がよくないと文句を言ってきた。そういう時マダムはアガシをかばうのが職業上 うとした。断って茶房に帰ったら、 の相手を攻撃するための悪口は経歴を意味する)凄い悪口でやり返して、その場を のしきたりだという。またマダムの実力を試される時なので(そういう時のマダム その男が怒って茶房に電話をしてマダムに従業 ある日、二十七才の男が一人でチケットを

解けて二十四時間ぐっすりと眠ったり、茶房で出会った人と個人的に会ったり、、親 たまに仕事がなく家に帰った時は(親には勿論工場の休暇だと嘘をつく)、 お客さまが神様なのではなく、アガシが女王様のようだと言われることもあるが、 (たのもし講)、という集まりに参加したりするという。

は百五十万ウォンくらいかという質問に対して、「珍島で三年間やってここに来た。 A女 (三十才) は本姓は言わない。 マダムとして警戒心の強い女性である。

ここの茶房はおとなしい客ばかり来るのでこの茶房を選んだ」と答えた。茶房につ いての質問や撮影についてはかたく断りながらも、情報を提供してくれた。

た。 一時間を過ごしたことからという語源説である。 チケットは二時間単位で二万ウォンであり、ボンという隠語の意味も教えてくれ "ボン"というドリンク剤(二千ウォンのもの五個)を持って行って

シが働いているので人件費がかさんで経営が大変だという経営者の立場からの話も の管理を意識した発言は、アガシの意見とはやや違った印象を受けた。 してくれた。 マダムはアガシの時間の管理はするが人事権はないとか、この茶房は四人のアガ またアガシは時々前金だけを持って逃げたりして困るという。アガシ

農民がご飯を仕事場まで持っていって食べることはあっても、 説明の延長線上で考えることが可能である。これはコーヒーの出前というよりは女 中華料理屋が新しく配達を行っているが、 次に茶房からコーヒーの出前をするという特徴についてであるが、 派遣の意味合いが強いからである。韓国では料理屋の出前はあまり行わない。 他の食堂や飲み屋の配達は全くないと 食堂の出前はない。 これも上述の

言っていい。このような状況でコーヒーが出前になったのは例外である。

『コーヒーとコーヒーハウス』には次のように書いてある。 このコーヒーの出前は中世の中東で盛んであったことと似ている。ハトックス著

道を走り抜けてい 服したのである。中東のどんな場所でも、市場や事務所にいたことのある人はよく ぶさまざまな店にコーヒーを運んでいった。こうして商人たちは客をもてなし、 知っているが、その習慣は今でも生きている。若い男や少年たち、コーヒー店の使 のものしかなかった。そこでコーヒーを入れると使用人に手渡され、 する人の便宜を考えて、たいていは商業地区にあった。店は、ほんの小部屋ぐらい "中世の中東のコーヒーショップは本質的に くのを目にすることは珍しいことではない。 カップと一人用サイズのポットをのせた盆を持って、通りや裏 [出前] の店だったから、市場で商売 彼は市場に並 _

(ラルフ・S・ハトックス著 斉藤富美子、田村愛理訳『コーヒーとコーヒーハウス』同文社

韓国における性倫理 · 貞操観念

